
愛し方

越華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛し方

【Zコード】

Z2617A

【作者名】

越華

【あらすじ】

ゲイの店を経営している27歳の野田秀時は、ある事で女性に対して恐怖感を持ち女性に対して普通に接することが出来なくなり、ゲイの道に入った。彼の寂しさを埋めてくれるのは、生まれる前から家族同士付き合いの有つた家の独り娘の優だけであった。親から離れて隣同士で暮らすうちに優は自分に目覚め始め人生を考えるようになった。彼から逃げない事が自分も救われる事だと考え、彼がどうしてゲイに入ったか解った時、自分への彼の愛が凄まじい事が解り、自分の彼への愛を疑い悩む。その結果自分の愛の強さに気づく。

⟨
o

愛し方 第1話 (となり)

深夜隣の住人が帰つて来ました。鍵を開ける音、ドアを最後まで持つて閉めないから、「ドーン」という音が響く。

この音達がするのが、午前2時過ぎ。

それから数を5まで数えると壁を叩く音。

叩く音も「コン・コン」2度続けて、1回たたくパターン・続けて2回たたくパターン・3回たたくパターンそれぞれ意味がある。

「コン・コン」3回鳴つたら私はベッドから急いで出て、冷蔵庫に用意してある冷えたおしぼり2本と、冷えた水を持ち下駄箱の上のトレーの中から、キーを手に取りながら、ツツカケを履き、大急ぎで外に出てドアに鍵をかけ隣の「コン・コン」の部屋へなだれ込む。風呂場へ行き、洗面器を持ち出し、ナイロンの袋を入れ開き、壁側のベッドで苦しんでいる女の顔をナイロンの袋に近づけ、洗面器を持たせると首におしぼりをのせてやる。吐いたときは水で口を濯がせ。

後は服を脱がし、寝巻きを着せ、布団をかぶせて、そつと鍵をかけて帰る。

部屋に帰ると眠気も覚めてしまつて、もう一度寝るのに苦しむ。3回の時は、殆ど意識が無く私独り用事をして、終えることが出来るので楽。

2回の時には、泥酔ではなく、酔つてはいるといつぐらいで意識は有り、口はきける。

しかし、正氣と夢うつつの状態の為服を脱がせ、寝巻きに着せ替え、それからである、顔のマッサージをしなければならない。もちろん化粧を落としてあげた後だから、時間がかかる。1回の時は何もしない。

しないがその他がある、話し相手だ。

これは彼女の仕事の休みの前日が長い、一番私がなごむ時であり、幸せな時もある。

彼女は、身長174センチ、体重は量らない、その辺のモデルなみの顔をしている。

一緒に歩くと立つので並んで歩かない。

秋の涼やかな気持ち良い今宵は、3回壁を叩かれた。

「今日は、イヤー！」と声をあげたが部屋の中は私独り、誰かが代わりに行ってくれるばづもなく、体を起こした。

寝巻きを着せ終わつた頃、寝ていてる彼女の目から涙が、こめかみを伝つて流れ落ちていた、綺麗だと思うのと切なく、悲しく、かさぶたの心の傷から血が滲んできた。

「これで、何回やる？」両手をいとおしく拭ぐ。

前にしつこく喧嘩越しに聞いた事があり、話を聞く事で、相手をよけい傷つけてしまつた事があった。

その時の彼は抑揚の無い、感情の無い言葉で話してくれた。

店の客に、店の子が侮辱され、拳句の果てに土下座して事を収めたと言つ。

私は、土下座、といふ事に衝撃を受け、私はそうして得たお金で暮らしている。

一人部屋で泣いた。

そんな私は傍で何も出来ないから、せめて呼ばれた時は出来るだけ速く行く事が、私の出来るごだと思つてしている。

でも、時々苦しくなる。

「おやすみ」と言つて布団を掛けようとしたが、ゆっくりと立つが開いた。

「お帰り！ お水いる？」と聞くと、返事の変わりに右側に体をずらし、ベッドの壁側を空けた。

「寝巻きが無いから」と答えると、上を向いたまま、ベッドの下の引き出しから、丈の長いティーシャツを差し出した。

薄い黄色、肌の色が何と無く見えそうな色だ。

おでこの辺りに感触を感じて目が覚め、「ハー、やつぱりだ」今の状態が頭に浮かぶ。

彼女から彼に変わつて、私の横で寝ている。

彼の左腕で腕枕、私の背中に彼の右腕、おでこの上は綺麗な顎が、完全に抱き寄せられた状態で寝ていた。

目を閉じて反対側に寝返りを打つと、右手がみぞおち辺りに来て、グッと引き寄せられた。

目を開けないでいたら、「た・ぬ・き」と耳元で囁かれ、それでもジッとしていると、背中が温かく成りだんだんと意識が遠のいて、寝てしまった。

耳元で「コー・ヒー飲む?」と言つたが、また眠ってしまった。「うん」と言つたが、また眠ってしまった。

目が開くと、枕にうつぶせで寝ていた。

ベッド横にあるイスの背に水色のブラジャーが、掛けたるのが見えた。

（ウソヤロー）「ブラジャーをして寝ると、健康に悪い!」と言つて、服を脱がさずに腕の所から、引っ張り出して取つてしまつ。前にもやられた。

「あー・・・、もう!」と言いながら隣の枕の下に顔を突つ込むと、愛しい人の匂いがした。

枕が少し上がり、笑つた目が覗き込んで、

「朝飯にしよう!」

「わかった!」起きたいが起きると、胸の形が判つてしまつ。顔だけ出すと、彼が足元に座つて「コー・ヒーを飲んでいた。

「何してんの?」（何でそこにじてるわけ?）

「人が寝てるのを見ると、安らかな気持ちになるな。昔、誰かさんを3時間ぐらい、見つとたときがあつたけど。寝相が元氣で、なかなかのもんやつたナ・」

「誰の・・・えつ! いつ、そんな事が有たつん?」（ホンナわけないは、絶対に）

「俺が受験勉強してる時。家より落ち着くんで、お前の部屋より借りとつたやろ?」（なんか口元が笑った。なんか知らない事がある。なんやろ、なんなんよ！）頭の中が無駄にくるくる動いた。

「それは、私が学校へ行つて、居ないときでしょ。う。・・・エッ！

待つて、さつき3時間で言つたよね。

疑問だけが口を突いて出でくる。混乱した。

「それって夜？ イヤ夜とかは無いよね？」

「うそ！ あつたんだ」親は何しどつたん。何を考えてんねんな。彼は、私の言う事に一々頭を縦に振つて、知つている者の余裕を漂わせて答えている。

「クラブ活動で疲れ切つとたのか、8時じろに行つた時も寝てた。夏はクーラーが利いてはかどつた。覚えてへんか？・・・ブラウスに、アイロンがかかつてたり、冬の制服にハーブの匂いがしてたり。あれみんな俺がしたんやで、脱いだ服をハンガーに掛けたのもナ。前は、私は寝ると少しごらいの音では起きなかつた。

「でもほとんどは母さんがしてたんでしょ？・・・冗談やろ？」

本当は、何回かでしよう？・・・アツ！」頭の中で弾ける音がした。

母さんは、私の部屋を掃除してくれた事など無かつた。

ある時期数ヶ月だけは良くしてくれた、不思議だつたけど嬉しかつた。

机の上に時々おやつも有つた。

「もう今日は、立ち上がりへん！ 絶対あかんわ」私の知らない所で何かがあつたなんて。

「おばさん俺の事信用というか、お前を任せてくれてたんやな、だから勉強もお前の事も、ガンバッテ出来た。いつ来ようが、いつ帰ろうが勝手にさせてくれたし。でも、さすがにお前の下着は、させてくれへんかつたな。安心したやろ？「下を向いてニヤついていり、まだ何かある。

「本当に？ そのニヤつきはなに？」胸の形が判らうがどうでもいいなつて、ベッドに座つて聞いていた。

「本間や、そこまでさせては申し訳ないて、叔母さん言うとつた。」
「この人には髪の毛が跳ねていようが、肌が見えようが関係ない、
私その者を見てくれている。」

可笑しくて声を出して笑ってしまった。

愛されている人間の豊かな笑い声だと、自分の笑い声を思った。

彼も微笑みながら立ち上がって、そばに来ると私にコップを持たせ、
水色のセーターを脱いで掛けてくれた。

白いシャツが目にしみ、コップを渡そうとすると抱きしめられ、彼
の体温が伝わって来た。

この後どうなるのかドキドキしたが、コップを持った手を首に回し
て、私も彼を抱いた。

彼の体がビクツ！としたが、心を乱してくれたお返しに、より強く
抱いた。

「『めん。』小さい声でやつぱり言った。

ムカツクからさつきよりもっと強く抱いてやつた。

「ふう・・・意地になつてへんか？ 苦しい、参りました！」手を
離してやつた。

「フン！ よわづちいの」私の心は冷えて固まつた。

「あんなに強く、抱きしめられるんやから、これから強く抱きしめ
ても大丈夫やな。」

「エツ！ どう言う事？」一人で冗談のような会話で、心を隠しあう。
心のジエットコースタ。

彼は愛してくれているけど、これ以上は絶対に前へ進めない。

週刊誌で見たけど女装する男の人に、付いている女人を『おこげ』
というそうだ。

彼には聞かせたくない言葉だ、笑いにする様な者ではないとキット
落ち込むと思う。

私がベッドを直し、コーヒーを飲み干して振り向くと。

彼は私の存在を忘れている様に寝巻きに着替えて、今綺麗にしたベ
ッドに、平氣で入つて寝ようとしている。

彼の夕方の出勤時間まで、話をしていたいのに。

「モウ！・・・帰ろりー！」服を抱えて、隣との境目の板を外した、ベランダのほうへ帰ろうとしたら、せつなく、どこかおどけた声で、

「今日は、独りで居たくないナ」その声を聞くと、すぐに服をイス

に置き、弱い私は目覚まし時計を手にとつて、

「何時？」と聞くと、

「4時間ある」時計をセツトして、ベッドの壁側に入り、彼の手を握り目をつぶつて、寝る用意に入つた。

「神様、私は、又、負けてしまいました」彼の押し殺した笑い声で、私も笑みを浮かべながら、何か話そうと考えていたが、1分もしない間に眠くなり、彼が腕枕をしようと動いているのは判るが、目を開けられない。

脳が寝てしまつていてるので、抱き寄せられている事も、何か遠くで起ころつていてる様に思え、意識は遠のいていた。

意識が遠のく前に、ハツキリしないが、おでこ・鼻・くちびると順番に温かいものが、触れていつたような感触がしたが、起きた時は寝る前よりも、もつとリアルな感じで蘇た。

あれは唇か？ 私の思い違いなのか、でも感触が確かにあつた。

そうだつたらどんなに嬉しいか。

彼が、女から少しづつでも、男に移つてってくれれば、心配している人達がどんなに喜ぶ事か。

いつも男ではない、それは、彼にとつては苦しみで、両方の心を持つたまま、生活をするのがどういつ事か、私には悔しいけど良く解らない。

その事で、二人の将来を楽しみにしていた、親達も悩み苦しんだ。

彼が車ごと海へダイブをした時、私は、自分しか彼を救う事が出来ないなんて、酷い錯覚をして、両親に心配をかけ、彼の両親に、辛い希望を持たせた。

何よりも彼を無視して、自分の感情で彼に付きまとひ、いつも一緒にようとした。

周りから一人が付き合っているよう、彼がノーマルに見えるようにした。

そして、彼にはこの事が、どれほど辛いとか、彼にいわれるまで気が付かなかつた。

彼に、離れるように言われたが、彼が私の顔を見るのが嫌になるまでと、言う条件で許してもらつた。

このマンションに越して来る頃には、一人の、周りの人には分からぬ、世界が出来ていた。

彼が店で働くために、親元から離れることを聞いて、「私を置いていくんだつたら、それでも良い。

私も家を出る。誰も知らない東京へ行つて、いい加減な生き方をして、自分の人生を壊す。」

と、本氣で脅した。

引っ越し前に幼馴染の両家の親を集めて、親達に彼が「偏見は自分が受けるから、そして、結婚を望むなら結婚をします、子供が欲しいのなら作ります。ですから、彼女を僕の傍に置かせてください。」泣きながら、いつ家出するか判らない私を、押し止めるように親達の了解を取つた。

午後3時、目覚ましが鳴る前に時計を止め、これから変わって行く彼の顔に、お別れをする様にながめ、お互いの体温で温まつたベッドを抜け出して、彼を起こす。

起きた瞬間から、夜のプロの女の顔に成る。

もう私の存在はこの部屋からは、無くなつていい。

私が居てはいけない空間。

シャワーを浴びている間にそつと帰る。

部屋に帰ると自分の気持ちを消す為に、ベッドに飛び込む。

隣では別の時間が流れている。

私の存在しない時間。

前は、気持は落ち着いているのに、たまに涙だけが流れる時があつた。

電話が鳴り「行くよ！」の声。

「いつてらしゃい！」声は明るく出るが、言葉に心が付いて行かない。

彼女の働きで生活をし、彼の愛で生きている。

時々私の人生は、私という人間はどうなつて行くのか、不安でじつとしていられなくなる。

彼にとって良き人が、見つかり幸せになつてくれれば、私も人生を生きていける。

でも、彼の存在を消すことが出来ず、私の愛は湖の底に沈んでいる。2人きりの生活でいろんな思いが、重く耐えられ無くなり、私だけの時間を持ちたくて、昼間働きたいと相談すると、一言「だめ！」夜カルチャーセンターに行きたいと言つと、危ないから「だめ！」辛かつたけど部屋へ行かないで反抗し、五日目に折れてくれた。カルチャーセンターは昼間行き、バイトは、条件としてカルチャーセンターのある週2日間のみで、夜7時までは帰るという事で許可が出た。

今では楽しくて、内緒でバイトの喫茶店へ週5日行つていて。店の休みと、彼の休みの日以外行つている。

時間は店の好意で、だいたい夜7時半ぐらいから11時半ぐらいまでとしてもらい、彼の完全に居ない時間帯にしてもらつた。バイト先は2~4時間開店している店で、彼の店とは逆方向。遅く成つたときはタクシーで飛んで帰り、今の所バレてない。少し怖いけどこの楽しさをやめたくない。

カルチャーセンターでは日本画を習つていて、この頃面白くなつてきて、これもまた楽しくて休んだことが無い。

終わつた後皆でお茶をするのが楽しくて、彼の知らない世界を持つ事で、構つてくれない、彼への仕返しのような気持になるのはびつしてか、私、近頃反抗期の様だ。

今日も電話で見送つた後、急いで用意をして店に行く。

店に出ると、勤め帰りの人達で半分の座席が埋まり、店に出ると背

筋がシャンとする。

ここが私にとっての、世の中であり自分独りで生きる社会だ。

10時を過ぎた頃から客層が変わつて、夜の仕事の人達で、一層店は活氣づく。

私の知らなかつた世界と場所、その空間に居るとなんだかワクワクしてくる、華やかで現実的で、それなりのオオラを持つている人が沢山居て、体の中から何かが湧き出でている様に見える。

彼も外では、ここに居る人達の様に、オオラが出でているのだろう見て見たい氣が何度もしたけど、綺麗な顔の彼女を見ると、劣等感で一杯に成つてしまつので怖くて行けない。

本当の理由は、彼女を認めたくないから認めると私の存在が無くなる。

今日は11時半を過ぎてしまい又、こんな日に限つてタクシーが捕まらない。

帰つたら12時を過ぎていた。

ベランダに行つて隣を見てみると、真つ暗でほつとしたが寂しさが、また生まれた。

今夜は月夜。

カーテンを開け放して、コーヒーを飲みながら月見をしていくと、何か香りが欲しくなつて、アロマの5時間持つと言われた、青い口ウソクを3本部屋のあちら、こちらと、点けておいてみた。幻想的で香りに酔い、ほのかな灯りにひたると、（世の中すべての人が、幸せであれ）という気持ちになる。

白いお月様とお酒が飲みたくなり、コンビニに勇気を出して急いで行くことにした。

帰つて来て、ベランダから隣を覗くと部屋は暗く、まだ帰つてきていなかつた。

酒のあては、貝の缶詰、出し巻き卵、漬物セット。

心が開け放たれ幸せで寂しく酔つた。

「この苦しみ、あなたは解りますか？」独り言を言つて、ビンを空

にし「親が見たらきつと泣くな」せつない独り言。

「一人で遠くへ行きたい、こんな暮らし嫌だ。よしーお給料もらつたら旅に出よう。そうしよう。このまま床で寝るのもまた、いいもんだ。誰かさんの様に介抱してくれる人が居ないのも、かえつて楽。私一人。」酔つて真つ直ぐ歩けなかつたけど、誰も入つて来れない様にロック・チーンをして、冷蔵庫のビール2缶を飲み干して、床に横になつた。

子供でもなく、妻でもなく、友達でもなく、知り合いでもなく、單なるお隣さんでもなく、女人の人を受入れられないから恋人でもない。涙が耳から床に落ちていく。

「何を私は、ウジウジしているのだろう、今日の私は変！」肩の痛みで目が覚め、痛みですぐに動けないのでじつとしていると、ベランダ越しの空が朝焼けで美しく、昨夜に続いて自然の美しさが今の大曇つていて私には有り難い。

カルチャーセンターの用意をして、ドキドキしながら電話を見ると、メッセージが入つていた「ただいま」不機嫌な声、録音時間は4時になつていて。

「私の事が心配じやないの？返事が無ければ普通心配するよ。」独り言を言い、急いで見付からぬうちに部屋を出た。
彼の部屋の前を通りの時はドアが開くのではないかと怖かつた。
バイトが終わつて、家のゴミを捨てに行く途中廊下を歩いていると、綺麗な彼女が、無表情で通り過ぎて行つた。

いつもドアが閉まる時に音がするのにドアが音も無く閉まつた。
私は固まつたままで後ろを見ることが出来ない。まだ11時過ぎ（何で今頃？それも完全にシラフで。部屋に帰りたくない逃げよう！）

とにかくバイト先へ逃げた。

誰かの家に泊めてもらつつもりで行つたが、バイト先の親しい人達は帰つた後で誰も居ない。

マスターと会つたので変な電話や、「不信な人が家のそばに居るの

で」と嘘を言って、ホテル代を借りようとしたが、明日まで帰らないので、自分の部屋を使うように言われ、断ればマスターを信用して無い様で、泊まらせてもらうこととした。

部屋はかたづいていて、綺麗に整理され「男の部屋」という感じがする。

ベッドのシーツを変えるように言っていたが、お世話になるのに新しいシーツを使うのは、申し訳なくそのまま使う事にした、枕はタオルをひいて、服のままベッドに入つたら、彼とは違う匂いがしている。

いい匂いだが化粧水が違うのか甘い匂いだ。

すぐに意識が遠のき遠くで声がしている。

マスターが朝帰つてきて困ると思い、チエーンはしなかつた。

重い意識の中で、帰つてきたから起きよつと思いつつ目が開かない。声は一人のようで、「恋敵」「仕返し」「もつたいない」と聞こえ、もう一人「いや、いい」この声は彼に似ている。

「おきて」声がして目を開けると彼が居た。

「なんで?」頭の中が寝起きのせいか、真つ白になつて止まった。マスターの顔を見ると「泊まつて貰つて良かつたんやけど。お迎えが来てしもうたから」とニッコリ笑い。

その横の人は、事務的にマスターに

「お世話に成りました。行くぞ」と私の顔も見ないで言い、先に玄関の方へ行つた。

マスターの方へお辞儀をして「どういう事か解らないけど、有難う御座いました。」

マスターも「ごめんね!」氣の毒がり、

「いえ、それでは店で、それとシーツ変えないで寝ました、朝シーツを変えよおもつて、私の匂いが付いてたら申し訳ないので、変えてください。」

「君の匂いのなかで寝るのも良いかもナ」

私が笑うと、マスターの顔が引きつっていた。

玄関に居る人が、怒った顔でこっちを見ているのが解った。

私は後ろに居る人をまったく無視して

「マスターの匂い好きです。とっても安らいでよく眠れました」マスターは苦笑いし、後ろに居る人に手を振った。

なんで？知り合いか？彼の表情がおかしい。

助手席に載るのが好きだったが、最近乗ることも無くなっていた。外はまだ暗い、何時だろう新聞配達の人が走っていたから、3時は過ぎている。

夜明けまでは時間が有りそうだ、この前の様な朝焼けが出て欲しいな。

ずっと外を見ていたが、家に着くのに時間が掛かっているのに気がつき、周りの景色を見てみると、やっぱり違う一時間は走っている。彼の横顔を見ると前より表情が穏やかに成つて来た。

（私の反乱で、パニクッテんだろうな、心が痛いけど、でも私は謝らない絶対に。）

やつとマンションの前に着き、先に部屋へ行こうとドアを開けたら「車入れてくるから、そこで待つといて！」 ウツー逃げれない。

穏かな朝だと言うのに、これから修羅場です。

大きく息を吸いゆっくり吐いた、2度した頃に戻つて来て、前を歩いて行く。

私は、さつきの決意とは逆に後悔で一杯になり、何に対しても後悔しているのか、彼に何を誤るのか、どう言つたら良いのか、解らなくなっていた。

エレベータに乗ると、薄つすらと良い匂いが私からしているのに気がつき、そつと襟を立て匂いをかぐ、マスターの匂いだった。

急いで上着のファスナーを閉め、襟を立てて、顎で蓋をする様に、上着の中へ顔をうずめた。

彼の部屋の前を通り抜けようとしたら

「お前の部屋に、頼むから他人の匂いを入れんぞいて。」 体が止まり。罪悪感が広まつた。

部屋の中へ引きずり込まれると、真っ直ぐ風呂場へ連れて行かれ、とにかくその場を逃げたくて、

「着替えないし、着替えとつて来る」

「無表情ですかさず「俺が取つてくる。先にシャワーしとつて「でも、どこにあるんか知らんやろ?」

「しつてる!」大きな強い声で言い切られた。

（あつそ！あんたは、なんでもしつてんねんな！）上から落ちてくるお湯の中で、無性に腹が立つた。

シャンプーや石鹼は彼の匂いのする物、部屋に帰つたら洗い直すつもりで、彼のシャンプーや石鹼を、いつもよりたっぷり使い、出ると、下着とティーシャツ・部屋着用のズボンが置いてあつた。

「私の何が解つているのよ、私の心と、下着や服は一緒じゃない」つぶやき。

怒りが湧き大声でわめき出しそうになるのを、こぶしを強く握る事でこらえ、頭にバスタオルをかぶつて、彼の座つているソファに座つた。

差し出された水を飲み干すと、急に悲しくなつて涙がポタポタと落ち（泣くな、泣くな）何度も自分に命令するのに涙は落ち、今までの悲しい、辛い、悔しい気持ちが止められない、閉じた口から泣き声は嗚咽となつて出て（バスタオルをかぶつてるから、見えないから）頭の隅でそう言つている自分がいた。

彼は動かすにじつとしていたが、次第にいろんな彼の悲しみが、わがままな私に伝わってくる。

洗面所で顔を洗つて、髪をドライア - で乾かしていると、自分の居場所が何となく解つて来た。

結論を出すのが怖いし、頭の中も整理されていない、寂しいからだけでは無い。

（お腹がすいた）「ああ！お腹がすいた、腹減つた」オーバーに声を張り上げると。

ドアが開いて、「う・る・せ・い。野菜サンドやで・・・」「紅茶ネ

お互いに引きつった、笑顔の会話が交わされ、引きつった笑顔の中から、私の帰りを待ちながら、サンドを作る姿が浮かびってきた。食べている時は、下を見たまま顔を上げないで急いで食べ、逃げるようにならぬ向かった。

ソファで眠気を我慢していると、後片付けを済ませた彼が横に座った。

（イロイロやな）肩を抱き寄せられたので、頭を彼の肩に載せると落ち着き、素直に「ごめんなさい」が言える気がして来た。しばらくの沈黙の後、彼の体が少し揺れ手で顔を拭いている、泣いている。

私も又涙が出てきた。（この人と、別れたほうがこの人の為に、成るんとちがうやろか？今まで勝手な思い込みで、この人の為と思つていたけど、自分の為やつた離れたくないから。私の気持ちで、この人を振り回したらあかんナ）

「ごめん。心配や嫌な思いさせて。」素直にそれだけは言えた。少し間が空いて彼は洗面所へ顔を洗いに行つた。

（言い出すのは私から、今だつたら私から言える、彼から言われてすがり付く様な事はしたくない）

「ごめん」横に座りながら言われた。

「何が？」判つていてる深い意味を持たない言葉だと言つたとを、でもきつかけにした。

「話せへん？」

「いいよ」いつもの優しい眼差し、心が揺れた。

「私達、少し離れてみいひん？」

「離れるゆうて、どうゆうこと？」

「お互いに違つ所で生活するゆうこと。」

「ぼくから、離れるゆうことか？」

「自分の生活の基盤がちゃんとあって、お互いの時間があれば会つむうこと」

「ほな、俺が時間が無いゆうたら、お前は会いにこつへんねんな、

俺に会いたくても「揺れた。

「時間がないんやつたら、仕方ないね」笑みを浮かべて顔を上げると、彼の顔色が変わっていた。

体全体から怒りが込み上げ、それを何とか抑えている。

「じめん、ちょっとシャワー浴びてくる」揺れた。

彼の下着と部屋着を出し、涙をこらえ風呂場の前で、「着替えおいたくから」言い終わった瞬間、風呂場から手を引っ張られ、シャワーの中で抱きしめられた。

「本間に離れるんか、なあ！俺もお前みたいに考えて、離れようと思つた事があつた。離れられへんかった、そやから海へ飛び込んだや。

男の時も、女の時もお前がいつも俺の中にいるんや。」良く解つていた、でも言わんとあかん。

「だから、離れるの！」今度はもつと彼を傷つける。

私も生きて行けなくなる。

（素肌にシーツや布団の肌触りが、こんなに気持ち良いなんて知らんかった。）

2度目の強引なシャワーで又、下着が要るようになつて、ベッドに入つて待つていたら、彼が、ベランダから私の下着を持つてコックリ歩いて来た。

「ピンクか、白か、迷うて、遅くなりました！」喧嘩越しの笑いを浮かべて、丁寧に言つ。

「10分も迷うか？ 第一私が、はぐく下着やで何で迷うわけ！」こつちも、ニッコリ笑い返す。

ベッドの足下に座り、背中を向け下着をよこさない。

「すいません下さい」丁寧にお願いすると、下着を座つていた所に置いて、

「ドーハー入れよう！」台所のほうへ行つてしまつた。

（この野郎、何にも着けてないのを知つて、そう出るか…）

ベッドに潜り込み顔を出して見たら、あつた下着が無く、ニッコリ

笑っている彼がいた。

(何かされる)

とつせにシーツの端を掴み、布団が浮き、そのとたん反射的にシーツの上を転がった。

「オー！」歓声をあげている。

「いいかげんにしてよね！」本当に腹が立つた。

ニヤ着いた顔で「復讐、苦しめたバツ！」

「もういい！」シーツを巻いたまま部屋へ帰ろうと歩いたが、シーツがきつく巻きついた為に、歩きにくい（エーイー）腹立ち紛れにシーツを取つた。

「コラ～、止めて！」彼の叫び声がして、ベランダの戸に私の手が掛かる前に、私はシーツに包まれた。

「ごめん、もうせえへん、頼むわ」後ろから巻かれた手は、大きかつたが、声は優しく、いつもの様に落ち着いていた。心は大きく揺れた。

兄が来てくれた。

優しい「安ボン」が私の引越しの為に。

「安ボン」にとつて、彼は男友達にうつるのか、どうなんだろうか、冷やかし半分に「そのお似合いのお一人さん、チャラチャラせんと、速よ梱包しておくれ！」2人はまったく動じない。

ビール片手に、語らいながら梱包を続けていた。

後ろに気配がし振り向くと、兄が青いナイロンの袋を差し出して、「こんな物まだもつとたんか。ほかすか？」外からでも中に白い布が入つているのが解る。

胃の底が緊張し、体全体に汗がにじみ出るよつた、感触と共に（どないしょ。見られたらどないしょ。）

「ほかしといて」いつもの様な調子で言つたつもりだが、2人の方へ顔を向ける事が出来ない。

カラカラの口にコーヒーを含み、飲み込もうとした時に、コーヒーが喉を通る音と、ナイロンの音が、同時に聞こえ反射的に顔を上げ

ると、彼が青いナイロンの袋に手を入れていた。

「出したらあかん！」叫ぶ。（神様！）

「あかんて？ブラウスに血が付いてるやん。どないしたん？　これ

袋からブラウスは出ていた。

兄はブラウスを見て私に「どうするのや？」「言つのか？」と曰で聞いて来る、そうゆう兄を見て一気に落ち着き彼に、私達家族が黙つていた事を話す事にした。

「安ボン、どうから話したらええ？」聞くと、近くのダンボールを脇へ寄せブラウスを広げて、

彼の側で「このブラウスの血は優ので、あの時、部屋に入つたらベッドで苦しんでて。もうビックリして、親を呼んで病院へ連れつて行つた、夜7時位かな、相手を警察へ届けることにしたんやけど、優が嫌やゆうから、届けは出さへんかった。傷も残らへんゆうし

「何でそんな事になつたんや！」驚きのせいか口調が強い。

自分が原因と知つたら……。

私が話す事にした「どんな風に話して良いかわからへんから、有りのままに出来るだけ、感情を入れないで話すわ、安ボンに言つて無い事も、あると思うけど、1年生の時、放課後3年生の女子に呼ばれてん。時チャンのクラスの子。」眉間に縦じわが入つた、もう話の半分は解つたと思う。

「時チャンのクラスに入つたら、時チャンの席に座らされて、髪の長い綺麗な人が、時チャンに会うな、他の人も、2人は上手くいつているから、私に邪魔をするなって。時チャンとは、別に何でも無かつたから、そこで解りました。言つとけばよかつたんやけど、理不尽さに腹が立つて。小さい時から私達は、将来一緒に暮らすと思つて、両方の家族もそのつもりで付き合つています。もし、時チャンが、他の女人人と付き合つてゐんだつたら、おばさんやおじさんから時チャンに、別れるように言つてもらいます。お名前は何といふのですか？どなたですか？と、言うてしもてん。ごめん。

それから、時チャンの机の上に腹ばいにされて、長い髪の人のがバン

ドで背中を何度も叩いた。その人と後どうなったんか知らんけど、それが原因で別れたんやつたら御免ネ」笑顔を交えて話した。

「「めんな、そんな事何にも知らんと。傷つけてしもうて俺は・・・

・」

彼を助けるように、大きな声で兄が

「髪の長い、お前と一緒に居た子といえば、吉川茜やな？時そやろ！優は、誰がしたか言わなかつたけど、これで解つた吉川に一言でも言わんと、腹の虫がおさまらへんわ！」

ブラウスを見ていた彼の心は今どんなんだろうか？

運送屋が行つた後、彼は何時もの様に仕事に出かけ、新しい部屋を兄と片付けて、家の周りを散策

しながら兄に、心中を見て欲しくなつて、

「なんで引っ越すことになつたか、ゆうてもええ？」

「ハードな人生送つてるからな・・・あいつの親心配してたけど、うちの親はちょっと安心してた。

23歳やつたらまだやり直し出来るゆうて、あいつには悪いけど正直ゆうて、俺もこのまま自然に終わってくれへんかな、と思わんことも無いねん、男の26歳はまだまだや、これからや。」

鼻の奥がツーンとして目が熱くなつて、涙をこらえるのに唇を噛み、こらえ無言で歩いていると、

「重たくなつてん」口から出でてしまった。

「生活がか？それともあいつがか？」

「上手く言われへんけど、生活とか時チャンとかとは違うねん、傍にいて私の人生じゃなく、彼の人生を私は生きてる。傍にいて自分の人生を、生きたいそんな事思でしもてん。」

「そうか。」

その夜、2人で布団を並べて寝た。布団の中で誰かと話しているようだつたが、私は寝入ってしまった。

バイトや好きなお稽古に通つてゐるうちに、1週間はあつとゆう間に過ぎ、1ヶ月を意識を持たない様に過ぎ、彼に連絡を取らずに

いた。本当はどれ位我慢出来るかやつてみたかった。

朝、携帯が鳴り久しぶりの声がした。

「おはよー、1ヶ月過ぎても電話がないねんけど、毎日が楽しいか

？」チヨシと機嫌が悪そ。

「おはよーー朝、散歩に行つたから気分爽快。怒つてるんやつたら切るわ。」

喧嘩をするつもりは無いけど、声を聞いてドキドキする自分と、私をほつたらかしに出来る人に腹がたつた。1ヶ月も電話をかけて来ないで、私をほつたらかしにしておいて、掛けてきて、聞いた言葉が皮肉。

「「ごめん。声聞いたら腹が立つて、時間ある?」腹が立つのは私のほつやつて！」

「いつも空けてるよ」嘘ではない。頭の中では、いつも空けていた。

「・・・ベランダで、昼飯食べよか。」昼には早いと言いたかつたが、ドキドキがやまない。

「タクシーで行くから10分で着くけど。用意手伝つわ。じゃね」電話を切つて急いで家を出た。

部屋の表札に書かれた「野田秀時」懐かしい、鍵は持つて来ていたがチャイムを鳴らした。久しぶりの彼は綺麗だが少し線が細く成つた様に見え、髪は肩を過ぎていた。

「こんにちは、お邪魔します。」わざと丁寧に言った。

優しい笑顔で「いらっしゃい、どうぞ」部屋へ入ると、いつもの彼の匂いがした。

甘いローションの匂い。

前を歩く彼の背中に体を付け「今度何ヶ月後かな?」ため息混じりに言つてみた、

「アホ！気が狂うわ。今度は許すけど、又こんな事したら一緒に暮らすで。」前に回した私の手を上から押さえて言った。嬉しいけど前と同じには成りたくない。

「エー、せつかく出たのに。」愛には包まれていたい。

「パスタ持つていって、ビールは後で持つていくから」てきぱきとして、白いセータが似合っている

誰かに自慢できないのが残念。

ビールで眠たくなり、2人で昼寝をする。久しぶりに深い眠りにつけた。気が付くと夜9時を過ぎていてベッドは私一人、バイト先に休むことを伝え、しばらく目をつぶつていたら、雨の音が聞こえ、暖かいベッドで又眠つた。夜中に目が覚めた時は、隣で彼が寝息をたてていたから、眠りにもすぐに入つていけた。

コーヒーの匂いで目が覚め、隣の枕を見るとでこぼこしてて、幸せな眠りの時間を過ごした。

「起きた？」

「ウーン！」気持ちよくて、ベッドから出れない。

「何も食べないで寝てたから、お腹すいたやろ、何食べたい？」

「なにもいらへん、（貴方がいたら何もいらない）このベッドにずっと居たい」

「そやな、そうしたいな！コーヒーはいっただよ」私の話に乗つてくる様子も無いので、

「シャワー浴びてくる。一緒にどう？」気分転換に言つてみた。

「先行つてて、後で行くから。」

「ウツソー。来るの？」でも私の中では、何を見られても良いと思つていた。

「入るぞ！」本間に来た。

「どうぞ、いいよ。」顔だけを見て気絶しそうになつたが、両手を前に出して、バスタオルを広げ私の顔だけが見える様にして入つて来た。自分の腰にもバスタオルを巻いて。

「なに？」気持ちを見られない様に精一杯の声を出した。

「体を拭いてやりたいけど、出て！」ニッコリ笑いながら言う事が出来る人間にムカツク。

彼が巻いてくれたタオルを、この前のシーツの時の様に取りたくな

つたが、ホットした気持ちと優しさが心地良く（きっと私今、幸せな顔をしているな）風呂場の戸を閉める時に「早く出てきてね？」つい新婚さんの言ひょうな台詞を言ってしまった。

「おう！」戸の向こうで返事が返って来る、これもまた新婚さんだ。笑おうとしたが笑えない。

ベランダに出ると少しだが夕焼けが出ていた、「もつそろそろ帰らないといけない」と、私を急かせているようで、夕焼けのオレンジ色は、せつなく、ただただ切ない。

タクシーの窓を開けて、風の中を走っていると、黙つて彼の部屋を出てきた切なさや、その他の色々な事が飛んで無くなり家に帰つたら、何も始まつていらないゼロの状態に成つていて、彼の存在自体知らない生活を始められる様な、気がして夜道を走り家に帰つた。あれから、電話の代わりに、葉書が毎週1枚届くようになった。簡単な時は「おはよう。今から仕事に行く」と書かれてあり、長いときでも葉書半分程で終わつていて。

声が聞きたくなるのを無理やり用事を作つて、外に出て我慢していだが、私も葉書を出すようにしたら、また違つた安らぎが生まれ、会わなくて辛くなくなつてきた。もう4ヶ月目に入つていて、このままでいい。

愛し方 第2話（ずーと、一緒）

喫茶店のかきいれどきの正月を、休み無しで働き自分達への「」褒美として、数人で新年会をする事になった。

正月も時チャンから新年の葉書が来ただけで電話は無く、一人になると声が聞きたくなるから、部屋中を雑巾を持って歩き回り、する事が無くなるとビールを飲んで寝るという、哀しいぐらい情けない日々を送っている。

自分の力で生きたいと思っていた、あのきらきらした物は何処へ行つたのか、今は新年会が待ちどうしい。

新年会は午後5時まで仕事をして、6時に居酒屋に集合して始まる事になつていた。

服を新年会用に女性軍は着替えて、髪や化粧も直して4人で行くと、もう男性軍は来ていた。

そこに居たのは男4人、隣に居たバイト仲間に「これって合コン？同じ店の人達としないよね」聞いてから、相手の返事も聞かないで、自分で答える私は少し動搖している。

バイト仲間の安代さんは「これって合コンみたいやね！」と言つてはしゃいで店に入り、初めての私は何かドキドキして、それでいて何か後ろめたい様な気持ちで、席に着き暫らくすると、皆話し声が段々大きくなり、手振り身振りで話さないと解らなくなってきた。私は緊張あまり食べれ無いでいる、中川さんが色々と氣を使ってくれていたが、正直放つて置いて欲しかつた。

こんな事は初めてなので、皆から注目されたり、中川さんがする事で一人だけ浮いた感じになりたくなかつたし、何時もより申し訳ないけど、愛想の無い態度をとつてしまつた。

2次会も両脇に吉田さんと中川さんがいた。

二人とも住んでいる所が同じ方面で、送つていくから3次会も一緒にこうと誘われ、残り5人で3次会へ行く事になつた。

普段は絶対行かないが、一人で帰るのが寂しかったのと、この一人は何時も、私を女としてではなく同僚として、仕事の事やプライベートな事も話してくれて、3人とも同士のよつた連帯感をもつていた。

飲みながら「この状態を時チャンが見たら、怒るだろうな」そんな事を考え、見られたら何て答えようと空想しながら飲み、人の話にも適当に返事をしていたら、皆の声が遠くに聞こえ、吉田さんと中川さんに酔つたから帰ると言うと、自分達も帰ると言うのと一緒に出た。

歩いているとだんだん眠くなり、足もだるくなつて来てしゃがみ込んでしまった。

「ごめん、酔つ払つた」一人に謝ると、中川さんが「吉田、俺が背負つから、靴持つて。タクシーが来たら捨て」

「かっこ悪いし、そんなん、男の人におんぶなんか、してもらわれへん」

「ええから、はよ！俺達かて酔つてんねんから、いつ動けんようになるか判れへんねんから」

もう私も限界だつたので甘える事にした。

「有難う、このお返し考え方とくは」

ボウとした意識の中で、前に何人かの女の人が立つていていたのが目に入つた。

その中の一人が誰か気が着き、あわてて背負われた肩に顔を隠して、立ち去つてくれるのを祈つた。本当にドラマの様に、中川さんが彼女の前で止まって、ずつて来た私を背負い直した。

「ちょっと、あなたち、その子を知つてるんだけど何処へ連れて行くの？」時チャンだ。

寝たふりをして彼らに任せることにした。

「この人を知つてるんですか？」吉田さんだ不機嫌な声で聞いた。
(良いから早く行こう。)

「私の隣に住んでいた人よ。だいぶ酔つてるわね、女の子をこんな

に成るまで飲ませて、何考へんのよ」私の顔を覗き込んでる気配がしている。（あつちへ行つて。）

「吉田タクシーまだか、つかまれへんか？」（お願い、中川さん動いて。）

「彼女は私が車で送つていくは、男の人人が送つていくより良いでしょ。」

「それはそうですけど、知らない人に預けるわけには行きません」（中川さん頑張つて言って。）

「その子の名前は、吉野 優、年齢23歳、アルバイトは5月からしているはずよ、これでどう？」

「解りました。じゃお願ひします。念のため名刺を頂けますか」（

中川さん、お願ひなんかしないで。）

「ちょっと待てて、アッそうだ、この子にはお世話になつたから、この子に代わつてお礼をさせて」

（お礼は私がします、貴方はあつちへ行つて。）

「いえ、俺達はいいです」私をこの人達は置いていくんだ・・・

「私の店で飲んでいって、もちろん御代はいりません。何でも飲んで、さあ行きましょう」

「おい、吉田どうする？」

「折角ですし、中川さんも重いでしょう、入りましょう」やつぱり置いていくんだ。

店に入ると、時チャンが店の人に「その子は私の部屋に寝かせて、二人にお酒をお出しして」と言つていたが、中川さんと吉田さんがソファに私を寝かせてくれた。

「さあ、店のほうへどうぞ」時チャンが二人を連れて行つた。店に入つて、なぜか安心している自分が不思議。

酔いがまわつて目をつぶつていると、時チャンが入つてきて、毛布を掛けながら「久し振りに会えたら、その人は知らない男の背上の上。それも見せた事のない酔っ払つた姿で、俺はどうしたらええんやろナ」

「『めん。寂しかったから』目を閉じて『』いるのに涙が流れた。

手で涙を拭いてくれながら「『ご免はこっちの方や、家まで送るから
ゆっくり寝とき』

大好きな匂いと、横の人の気配で目が覚め、部屋の天井で何処かす
ぐに解つた。

懐かしい寝顔、暖かいベッド、これで一人何も無いなんて、誰が信
じるだろ？

誰も信じるはずが無い。

ベッドをそつと抜け出し、今のマンショソントは話にならない位の大
きな風呂場、酒の臭いを消す為に、香料の入った沐浴剤を多くいれ
て湯船につかり、浸かりながら何をどう言つて帰ろうか考えている
と「もう起きたん？風呂で寝たらあかんで」「うん、大丈夫」私の
癖を良く知っている。

風呂から出ると新しい下着や洋服が置いてあった。

前だつたら優しさに腹が立つていたが、今はこの優しさを離したく
ない。

「下着も洋服もぴったり、彼女の？」作ってくれたジュースを飲み
ながら聞く。

「そうや。俺の出て行つた彼女のや！」笑いながら、ゲンコツで私
の頭を押す。

「ナア・・・時ちゃん」

「うん？ 何？」CDを選んでいる彼に素直に言おつと繋がり、自分
の気持ちを。

「心が寂しいて解る？」

「解るよ」ショパンのノクターンがかかった。

「一人で生活始めて私それが解つた。私の愛情を渡せる人が居ない
寂しさも」ショパンが私に言わせる。

ソファに居る私の側に座り、私を見ないで次の言葉を待つていた。
「『ずーと側に居て、結婚して』申し込んだ。

「『ずーと側に居る。でも結婚はでけへん』意味が解らない。

「家を出るときに親達に結婚する、子供も作るつてやうてたやん」
「私の方へ身体を向け「結婚ゆう事は、子供を作るような事をするゆう事やねん」

「そんな事分かってる、すきやから愛しているから自然なことや」

「・・・・俺にはでけへん」・・ああ、やつぱりそうだった。この人はそうだった。

自分はなんて酷な事をこの人に、この愛は叶えられないと解つていたのに。

不思議に涙が出ない、別の処が心が、大声で泣いている気が狂たようだ。

「ごめん、そうだったね。今の話は聞いていない事にして、ずーと死ぬまで」

「俺にはお前だけや。家を出るときはお前にすがって生きるしかなかつた。でも今は俺の心の深いところまでお前や、人に触れて欲しくない闇の部分にもお前が居る」

「子供なんか作らなくても良い、いつか、もしかしたら、そうなるかも知れない。・・・結婚したらつて、思つてしまつただけ」

「一生お前だけしかおらへん、結婚して、ずーと一緒にいたい。でもそれをしたらお前の女としての人生は無くなる。よく考えて。

それと親にも優にも言つてない、背負つていかんなあかん重たい物が有るねん、お前だけがそれを聞く権利がある。言わなくて済めば良いと思つていたけど。聞く決心が付いたらゆうて」

「うん、そうする。頭の中が考えることが一杯有つて弾けそう」「そうか、弾けそつか」声を出して笑つてはいるが辛いだらうな。

「いつも御免」優しく笑いながら抱きしめて。

「こうしてお前が居てくれるから」

「こうして時ちゃんが居てくれるから」一人は私次第で、ずーと一緒に居られると思った。

愛し方 第3話（店）

夜、店に出ると、中川さんが直ぐに話しがけてきた。

「昨夜、大丈夫だったか聞いてきた。

「ひどい！ あの人預けるなんて「オオバーに」と、ビックリして、

「どうしたん！ 何かあつたん！」

「夜中に、『ご飯を作れって言つは、朝まで話に付き合わされるは、大変やつてんから。寝不足よ、ホラ見て！』顔を上げて、目のところを指差した。

嘘ばつかりついてやつた。あのまま背負つて、サッサと行ってくれてたら、こんなに頭の中が弾けそうな事に成らなかつたのに。もしかして、時チャンは遠回しに「自分の事は諦めろ」と言つて、やるか、

イヤ！ そういう事では無かつた。

そやけどなんで？

一緒に居たいから結婚したいと望んではいかんの？
子供は要らないって言つているのに。

闇の部分つて何やる？

アア頭が痛い！ 一日酔いで痛いのか、考えすぎで痛いのか、分から無く成つて來た。

其れから何日か経つて、もう後1時間で、今週の仕事はお終いと言う時に、中川さんが私の側に来て、私と同じ様に、店のホールに向いて立ち並び、私の顔を見ないで、

「仕事終わつてから、付き合つて欲しいねんけど、突然の言葉に横を見上げると、彼は無表情で前を見ていた。

サボつて無駄話をしていると、誤解され無い様に無表情で、話しているんだと思い、私も前を向いて無表情で、「怖いですね」と言つてみた。

何か有つたのだろうか？

凄く気になつて聞きたかったが、仕事中の為周りを気にしながら、「何処で待つてたらしい？」前を向いたまま聞くと、

「店を出た東角、僕も8時で終わりやから、さつきの緊張した話し方とは違い、彼のいつもの話し方にもどつていた。

「分かりました。私だけですか？」ちょっと不安で聞いてみた。

「そう、吉田は今日は遅いから。でも知つてるから、後で来るかもしれんけど。それじゃ後で」

店の前からタクシーに乗り、中川さんは何も言わないので、私も黙つて乗つていたが、走つてる方向でなんか嫌な予感がした。

中川さんは何か緊張している様で、その緊張が伝わつて話が弾まず、タクシーは中川さんの言つとおり走り、止つた。

見事に予感は的中して、時チャンの店の前に来ていた。

店には、時チャンに凄く叱られたけど、どんな店か見たくて1回来た事がある。正確に言つと、この前酔い潰れた時を入れると2回だが、この前のは記憶にほとんど無いので、一度来ただけと言つ方が正しい。

前に来た時は昼間だつたので、今見ているよつた、明るいガラス戸では無かつた。

電飾が綺麗で、品が有り、ドアを開けると楽しことがある様な、そんな店の玄関に成つていた。

中川さんがドアを開けよつとしているが、ドアの向こうに時チャンの世界がある。

私を見たらきつと怒る、いやビックリして、怒つて無視される。やつと一緒にやつて行こうと言つ事に成つたのに。

この人に私達の事を話しても、理解出来ないだひつじ。

強引に、少し開いたドアを両手で閉め、

「私帰ります。ここに入りたくないんです」パニクつてゐせいか敬語が出た。

「ここにここで、ただ酒飲んだから、そのお返しをせんと氣がすま

へんねん。優ちゃんの知り合いやつたら余計や、僕一人やつたら、よう入らんから優ちゃんに来てもうてんけど。頼むは、一緒に入つて」

中川さんの影に隠れて入つていつた。

入ると店の中を見ないで、ボーアイさんと斜め下だけを見て席に着いた。

中川さんと向かい合わせに座り、横に元男だとはとても思えない、綺麗な女性が一人来てくれた。

飲み物を注文する時に、後頭部に痛い視線を感じ、後ろを振り向かなくとも時チャンと分かっていた。

目に見えない時チャン光線は、怒つていた。

私はもう開き直つて堂々と遊んでやれと思い、ウイスキーをロックで飲み、私の左に座つている女性と話も弾み出し、その頃になると時チャン光線も感じ無くなり、店も忙しくなつてきた様だつた。

私と話している人は、名前を「水城^{ミズキ}」と言つそうだ、そのミズキさんの頬つべたと下唇がふつくらしていて、触つてみたくなつて「ちよつと、触つてみてもいい?」と聞いてみた。

中川さんは驚いていたが、「女人やからいいよ、はい!どうぞ」とミズキさんは、胸を突き出してきた。

「『めんなさい。胸と違うのよ』笑いながら言つと、

中川さんとミズキさんの声で「エー、違うの?」

ミズキさんの声が完全に男の声に成つていたので、又、笑つてしまい、もう一度お願いをして頬つべたと唇に触れる事になつた。頬と唇をそつと触つていると、

「何してんの?」吉田さんが来た。

事情を話すと「僕のも触つてみて」と言いながら、私の横に座ると私の飲んでいたグラスを空け、

みずきさん達に「この前は有難う御座いました」とお礼を言つていた。

一番私がお世話になつたのに、まだお礼も言つていなかつた。

言おうとしたその時、ミズキさん達が「ちょっと、失礼します」と言つて、会釈をして席を立つて行つた。

他の席でも、店の人達が席を離れて行きました。

きっと、ショウが始まる。不安で逃げ出したくなる気持ちを抑えて、迷子になつた子供の様に、店の中を見回し、時チャンを探した。カウンターの傍で、私を見ている時チャンの目に会い、そつと席を立ち、向かつた。

時チャンは、何も言わず鍵だけを私に渡してホールへ行つた。店の時チャンの部屋けん事務所に入ると、店からダンス音楽が聞こえて來た。

テーブルの上にお弁当が有り、その上に紙が貼つてあつた。

「優へ、お茶が入つています、お前が飲む頃、猫舌のお前に飲み易くなつてゐると思う。しつかり食べろ!」私が、食べていないので知つていて、用意をしてくれた、そして、この部屋に私が何時来るのか分かつてゐる時チャンに、それと、時チャンの女の部分を認めたくなくて、私がショウを見れ無い事を知つてゐる時チャンに、感謝と刹那さで、涙が落ち、また落ちる。

お弁当を口の中へ押し込んで、お茶で、流し込む事をしていると、ステージ衣装のタキシード姿でミズキさんが入つてきた、

「あつ、御免なさい。手袋を取りに来たら電気が点いて・・いたので・氣になつて、大丈夫?」

横に座り私を見て、そつと「可愛そうに・・・」と低い声で言い、私がどんな気持ちで今居るのか、この人は何となく分かつてゐる。止まつていた涙が溢れ出して来て、止め様と手で拭いても流れ出でくる。

「止まるお呪いをして上げようか?」又、優しい声で言つた。

するとミズキさんの顔が段々近づいてくる。

これつてど言う事?エツ! もう直ぐ鼻と鼻が引つ付くけど、これ御呪い?

頭の中が真つ白に成つた時に、「ミズキ!」鋭い声がした。時チャ

ンじやないみたいな声が。

ミズキさんは、ニコッと笑うと顔を離し「じゃーね」と囁いて出で行つた。

ミズキさんと同じタキシードで宝塚のスターの様な時チャンが立つていた。

これつて、女装?、男装? 考え始めたとたん。

「一人で居るんやから、鍵せんとあかんやろー」怒つている。

アツ! そや、今何やつたんやろう?

「時チャン今何? 何やつたん? やつぱり御呪い?」

「何やつた? お前に、チユ・ショウと、しつたんやろー」

「エー? エツ御呪い違うの?」

「アホ! ・・・御呪いて何や?」

「さあ、知らん」泣いてたなんて言われへん。

「そやけど、ミズキさんがそんな事するとは、思われへんは「女に成つてゐるのに」。

「もうええわ、帰ろー」私の為に仕事を早く終えるのだろうか。

「時チャン、私だつたら中川さん達と帰るから良じよ」ウツワー、後姿でも怒つてゐるのが分かる。

「さつきみたいな、能天気な事が有つて、ええか、ようく聞いて下さこよ。私が、余り良く知らない、それも酔つてゐる男一人と一緒に、貴方様を帰すわけには行かないでじょう。如何ですか、分かりましたでしょうか」

怖い時チャンをちょっと、いじくつて見たくなり、泣かされてる仕返しをする様な気持ちで、

「時チャン気が付いてないと思つけど、スゴーイ、変な敬語に成つてるよ」

言つてやりました。

振り向いて「なあ、俺の部屋・今・凄い・汚いねん、お前の部屋に今日泊まるで。ええやろーやあ、帰ろー」と言われてしまいました。

私は負けても嬉しいです。

店に居る一人に挨拶をしに行くと、中川さんはすっかり鼻の下が伸びて上機嫌、吉田さんは酔っ払って、私と一緒に帰ると行つて、きかないのを、時チャンが引き離して、それでやつと私と時チャンは、店を出る事が出来ました。

吉田さんを引き離すとき、傍に居たミズキさんの足を時チャンがほんの一瞬ですが、ミズキさんの顔を見ながら、蹴るのを見てしました。

私の知らない時チャンを、幾つか見てしまい、店に行く事がもう無いように願いたです。

「時チャンたら、チユ・ヤテ・」車の中で、冷かしながら笑い転げていた。

始めは笑っている私を無視して、運転をしていたが、
「もう、ええつて！」と言しながら「ヤニヤしている。その顔は大きな立派な大人だ。

愛し方 第4話（桜の花）

何かに起された様に、朝5時に目が覚めた。

しばらくベッドの中でボーとして居ると、部屋の中は薄暗いのに何故か、

ワクワクする事が起つた。そんな不思議な気がしてきた。
お湯を沸かしながら、ベランダのカーテンを開けると、
外は春の雨が降っていた。

雨やのに・・・、ワクワクするのは何で？

暖かい朝やから？

早く目が覚めたせい？

ベランダのガラス戸の傍に、イスとコーヒーを持ってきて、
時ちやんの、この前言つた事を考えながら、雨を見ていた。
雨が細い雨に変わり、辺りも少し明るくなつて来たようだ、
時計を見ると時間は7時になつていた。

朝の気持ちを確かめたくて、外に出てみることにした。

私が気に入つて買った、男物のペパーミント色の大きな傘と、
オレンジのレインコートを着て、今朝のワクワクする気持ちを持つ
て、

期待一杯に部屋を出た。

小1時間程歩いて、公園で大きな桜を発見した時は、
雨はもうやんで日が射していた。

「ウワアー！」と、声にならない溜息のようなものが、体の中から
出た。

自然に感謝！

公園中の桜を観て周つた後、あの人にはこの公園の桜を、
プレゼントしようと思い立ち、ずっと雀が桜の花を突つつき、
花の茎の所から切り落としたのが、木の下を薄つすらと白くして
た。

その桜の花を、レインコートのポケット2つと、頭に被る大きな三角の所と、傘を少し開けた所に、それぞれ一杯に入れて潰さない様に、

そつとタクシーに乗つた。

こりいう時にいつも思う、すぐに、そつと行ける、ドラえもんの（どこでもドア）が有つたらと、幼稚かも知れないけど本当にいつも思う。

どきどきしながら、鍵をゆっくり開け、いつもの様にチャーンを、掛けていない事を、願いながらドアを開けてみた、ドアはゆっくりと開いた。

遮光カーテンのせいで、部屋に入つて直ぐは何も見えなかつたが、だんだん目も慣れてきたので、入り口で桜の花を全部だし、レインコートも音がするので脱ぎ、奥の床から撒いていった、最後にベッドと、枕の横にも撒いたが、深い眠りについているのか、時ちゃんは上を向いて静かに眠つていた。

湯船に、私が買って置いた桜色の沐浴材を、洗面所から出して入れ、湯張りと保温をして、湯船の周りに少し桜の花を置いた。手紙を書きたかつたが、音をたてて起こしたら、

このに『企画』が飛んでしまうので止めた。

帰りはタクシーに乗らず、弾む心を楽しみながら、一時間程の距離を歩いて帰つた。

きつと起きるのは、昼近くだらうとは分かつてゐるが、落ち着かず家の掃除をして紛らわせ、携帯が成るのを、数分おき、数十分おきに、時間を見ながら待つてゐた。

12時を過ぎたら、段々落ち着いてきて、喜んで貰えたらそれで良い、

自分も楽しんだし、電話は付録のお楽しみと想う事にした。

絵の課題を出して描いていると、気が散るどころか乗つて來た。気が付くと3時をまわつており、コーヒーを一口飲んだときに携帯がなり、

又偶然にも玄関のチャイムも鳴った。

まず携帯に出ると時チャンで、

「電話と玄関のチャイム、両方鳴つてん。ちょっと待つて」

携帯を持ったまま、玄関のチャイムに出ると、

「同僚の吉田です」ビックリした。でも、同僚は入らんと思つねん

けど、

「時チャン、ちょっと待つてね」と言いながらドアを開けた。

携帯から「優、何のようか聞いてから開けなあかんで！」

「残念！もう開けてしもた」

吉田さんが気持ち悪いぐらい、愛想のいい笑顔をして立つていた。

「吉田さん、どうしたん？」私も釣られて、いい笑顔で聞いた。

「ああ、電話中やつたん、御免。待つてるから、どうぞ」笑顔で

言った。

携帯の向こうでは、「早く、用件を聞き」時チャンの声がしていた。

私も早く桜の花の反応を、時チャンに聞きたかったから、

吉田さんは早く用件を言って、帰つて欲しかつた。

「かまへんよ、ゆつて何？」携帯の向うでも黙つて聞こうとして

いた。

「いや、電話から先にどうぞ」私の顔から笑顔が一瞬消えた。

「時チャン、先に言って」本間にこの吉田！。

「吉田さんつて、この前店でお前に絡み付いて、離れなかつた奴や

る？」

「そこまでは、してなかつたと思つけど」ちょっと違つと思つけど。

「気つけや！今からそつちへ行くわ、この前一人に教えて貰つたから」

そうだ時チャンは、私を送る積もりで、家を聞いて知つていたんだ。

「大丈夫よ！」吉田さんの顔を見ながら笑顔でいつた。

「・・・分かつた。桜ありがと、すつごい嬉しかつた。

会いたいねんけど桜の下で、そこでタコ飯せえへんか？」

本当にこの人は、私がして欲しい事を先に言つてくれる。

「夕方ね、何時にする？」と聞いた時、

「今日の夕方はあかん！」突然、吉田さんが話に入ってきた。

「時チャンつて、あの、お店のママさんやろ、ちょっと貸して」と言つて携帯を取つた。

「こんにちは、吉田です。今日お店の方へ行こうと思つて、優ちゃんを誘いに来たんです。僕一人ではチョット入りにくいので、すいません。でも、優ちゃんと夕方会うやつたら、僕も是非入れてください。お願いします」

何を言うのこの人は！

馬に蹴られて死んじまえ！

「吉田さん、何とかに蹴られて死んじまえって言つ言葉しらん？」時チャンの笑い声が聞こえてる。

「え？」本当に知らない顔をしていた。

携帯を取り上げて、時チャンが断るのを期待しながら、

「と、言つのが用件みたいですが、ごめんね！」

御免の言葉に色々乗せて言つた。

「夕ご飯は、又今度という事にしようか、ご飯は一人で食べたいな」

「そうだ、他の人に気を使わずにゆっくり食べたい。

「うん。吉田さんは夜8時ごろ店に連れて行くわ」

私はバイトがあるし、店の中に入つても座らないで、

帰るつもりで言つた。電話を切り、吉田さんに言おうとしたら、

「夕方の約束無しになつたん？」心配そうに聞いてきた。

「バイトも有るから、時間が合わなかつたから、大丈夫気にせんどういて」

本当は十分気にして、落ち込んで欲しいけど、これも運命。

「申し訳ないから、晩飯、僕がおごるわ」

何時あんたと、晩御飯の約束した？

「有難う、用意があるから30分程、時間潰して来ててくれる？」もう絶対おごつて貰う。

「ほな、喫茶店でも行つてつぶして来るわ」

「ニッコリ笑つて、行つた。

「飯を食べて時チャンの店に着くと、ちょうど8時だった。

途中どうしてか、吉田さんはチョコレートの詰め合わせを買つ。

店に入ると直ぐに時チャンが、来てくれた。本当に綺麗だ。吉田さんは、買ったチョコレートを渡して、何故かニヤケていたが、吉田さんを席に案内して行く、時チャンに背を向けて、店を出た。きっと、時チャンは私が店に居なくても、すべて分つているだろつ。次の日バイトに行くと、吉田さんと中川さんが側に来て、

「昨日飲み過ぎて、ママさんの家に泊めてもらひてん」何を言つているの？

「おまえナ！」と中川さんが言つ、私も言つたかった。

「違うよー変に誤解せんぞ、違つて。」私はその言葉にムカツイタ。

何であんたなんかと、アホ！

「声がして目を覚ましたら、男の人居て、それがママやつてんけどナ」

私を見ながら嬉しそうに話している、

「それで、お前どこで寝たんや」やつやー。じーで寝たんよ。

「もちろんベッドや」ショックだ。

「お前大丈夫やつたか？」中川さん、どうこうの意味で聞いているの？

「何をですか？ 僕は彼女に指一本触れませんよ！」一人の話に腹が立つ。

「それで、時チャンはどこで寝たの？」私はショックを受けていた。

「僕と一緒に寝たんと違つかな」おつとり、ニッコリ笑いながら言った。

お腹の底から腹が立ち、背中や首の後が熱くなつて、汗がでてきた。

「それより、ビックリしたわ」何よ、こつちがビックリするわ。

「部屋の床一面、サクラの花だらけで、歩く時にふまんよつに気が付けて、

歩くよつと言われてんけど、下見たら丸く足跡みたいに隙間が付け

てあつたわ

「何か、あの人に会いそつやな、でも、男には会わんで」風情の無い奴や。

「でもね、中川さん男のママさんも、カツコよかつたですよ、ナア優ちゃん」

「カツコいいと思つよ」感情を出さない様に言つと、

「ほんで、僕がこのサクラビュしたんですね、つて聞いたらプレゼントやで、

朝起きたら床一面桜やつてんて、凄いやろ。僕も欲しいわ

「そんな恋人はよ作れ！でも、あの人の恋人て男？女？どちらか聞いたか？」

二人の会話を、興味無さそうに聞いていたが、これにはドキッとした。

「聞いたけど二ヶ所りするだけで、答えてくれへんかった

「優ちゃん知らへんのか？」中川さんが聞いてきた。

「さあ、知りませんけど」愛想無い様に答えて、何気なく吉田さんを見ると、

私を見て二ヶ所りと優しく微笑んでいた、この二ヶ所りは何やろ。

「吉田さんだけ、店に置いて先に帰つてしまませんでした。」と謝る

と、「こつちこや、もう此れからは、一人でも行ける様になつたから、

有難う

エッ！どうこつ風になつたんやろ、時チャンと仲良くなつたと言つことかな、

もしそうやつたら、私達の中に入つて来られたようで、凄く不愉快でムカツク。

何かバイトしてゐ時でも、イライラして吉田さんと、何時もはする仕事を、

気がつかない不利をして、吉田さんにやらせた。

家に帰つても落ち着かなくて、だんだん時チャンに腹が立つて来て、

部屋の桜を取りに行くことにした。

部屋の電気をつけると、本当に足跡のように丸く空いていた。

時チャンの歩く歩幅に、動く方向に空いていた。

彼の歩幅の通り足を乗せて歩き、間接照明のスイッチを入れてみた、部屋が幻想的で、桜の花が浮き上がり、その美しさに動けなかつた。このまま帰りたくない、部屋に来たことだけを伝えすぐには帰るつもりで、

携帯に電話を入れてみた、仕事中だから出ないだろうと思っていたら、

直ぐに出てくれて、用件を話すと直ぐ帰ると言つ、私は待たない積もりで、

部屋の中の幻想的な美しさを、もう一度見たくてソファに座つていると、

突然鍵が開く音がして、桜の花の上を歩いて彼が帰つてきました。

「ただいま」走つたようです。

「おかえり、早かつたね」私も桜の花の上を歩いていきました。

愛し方 第5話（知らない恋）

前回までのあらすじ

親同士が仲が良く、お互の家を行き来して育つた二人。

優（吉野 優）23歳、時ちゃん（野田 秀時）26歳。

優、時ちゃんと呼び合い、秀時がゲイバーで働く時に、親の反対を押して優は秀時の隣の部屋で暮らし始めた。

暮らしていく中に、自分で生活をしたくなり引っ越す。

その生活も慣れてきた時、バイト先の人からショキングな話を聞いた、二人の場所であつた秀時の部屋に、一人以外の人間を秀時が入れたと言う事を聞き、秀時の部屋へ行く。

私が携帯を入れた時、時ちゃんは丁度マンションの傍に居て、携帯を切ると走つて帰つてきた。

走る音が部屋の中まで聞こえた。

鍵を開け苦しそうに息をする、時ちゃんスマイルの彼、桜の花の上を歩きながら、彼の笑顔に近づいて、

「早かつたけど、体の調子でも悪いの？」顔をほこりばせて聞いた。私の言葉にビックリして、ニヤと笑うと呆れたと言つ風に部屋に入り、

「あほ、今何時やおもてんの？」自分の時計を外しながら私に見せた。

時チャンの時計は午前2時で、私の3千円の時計は午後11時で止まっていた。

「あつ！電池が切れたんや。新しいの買わんとあかんわ」時計をしている私の腕を持つて、

「時計屋へ行つて電池換えてもらつたら、まだ使えるやん」勿体無いと言いたげに言うと、私の腕を離した。

「お言葉ですが、この時計の電池を変えるお金で新しいのが買えるのよ。

使い捨てを「存知？」世間知らず……」反撃を期待したが、なかつた。

顔を上げると子供を見るような目で私を見て笑っていた。

「こういう時は嬉しくなるのだが、恥ずかしくて目を反らしてしまつ。「時チャン、桜かたずけるね」一人でソファに掛けながら言うと、「お前に踏まれた桜は可愛そうやな、踏まれて蹴散らされてる」確かに、あつち、こつちに飛んでいた。玄関近くのは、そのままだ。「それにしても、部屋の中ええ雰囲気やね」琥珀色の灯りに桜の色。「うん」彼は桜の上を優しく歩き、グラスに入つたビールをくれた、私が、「ハイ！お疲れ様でした」と、グラスを合わせ一気に空けると、

「お腹空いてたのか？」と聞いてきた、お腹？「喉が乾いてたのかやろ？」

彼のグラスを見ると、ビールはイッパイあつた。

「ビールは一気にグーと行かんと、それ飲まないの？」
彼のを飲み干した頃に、腹が立つことがあつたのを思い出した。部屋の雰囲気は最高に良く、感情のままに言葉を出したく無くて、ゆっくり彼の肩に頭を倒し、小さい声で、

「昨日、吉田さんが泊まつたて？」怒りを抑えて聞いてみた。

「うん、泊まつたよ、酔つ払つて住所も言えなかつたし」私の肩を抱きながら、何も気にしていない様子だ。

「ベッドで寝たんやね、一人。もう……私だけの場所はないんやね」

やつと気がついた様で、座り直し私のほうを見て、

「気が付かなかつた、ごめん。」

「あのベッドに、二人で居るのが好きだつた。」ゆっくり私は言った。

「シーツとか布団を変えるとかの問題じゃないよな？」

確認をする様に私に聞いて来た。

「この部屋は、私と時ちゃんの部屋で、この部屋で二人でいる時が心の時間で外の時間は存在せえへん。部屋を出て外の世界に一人でいる時はただの生活の時間。そう思つてたんやけど」

時ちゃんは、「分かつてるつもりでいたけど、でもな」

「そう言つうと、ため息をついてソファの後ろにもたれた。

「時チャンのした事は正しい。でも私には辛いことや、この部屋にはもう

二人だけの時間は存在せえへん、三人の時間が出来て私の場所は無くなつてしまつた」

前の私だとたら、泣きながら言つていただろうが、今は泣かずに言つている。

「ごめん。どうしたらええ? この前みたいにお前と離れる事は出来へんで。あかんで」

両手を頭に乗せて強い手で私に言つてきた。

「私の居場所を作つて、私自身解らない。」

私の肩を倒して彼が膝枕を私してくれ、私の髪や肩を撫ぜながら無言が続いた。

「新しいマンションを見つけるわ、そこで一緒に住も」凄い答えが出了た。

「そんな簡単なん」私は違うと思う。それにもう少し今の生活を続けたい。

「お前は今の生活をもう少し続けたいと思うからけど、俺は一緒に居たい」

「でも、結婚は出来ないっていうんやろな。」

「一生、話さんで済むんやつたら、そうしたかつたけど・・・優ともう一人の為に」

もう一人?この前言つていた告白の様な事かな、不安が広がり起きれなかつた。

話を聞くと時ちゃんと離れてしまう事になる様な気がして。

「どうしても聞かなかんこと?」

「怖いか? 優やから、言わんとあかんねん。お前が俺の人生やから分からぬが涙が出て止まらない。」

膝が濡れて彼に分つてしまわないように袖で拭いた。

部屋の薄暗さが余計に話の深刻さを増すように思えた。

「どう話したらええのか、ずっと考えていたけど在った事を言つわな。」

高三の時付き合つてた人がいた。優にも迷惑を掛けた吉川茜や、髪の長い優しい子で、優にあんな事をする様な子とは本当は違うねんで、

ジョークが通じて、付き合つてくれて言われた時は、嬉しかった。大学に入つてからも毎日のように会つて。

深い付き合いをする様になつて・・・・・

男女の仲になつてから、どんどん俺にはまつてくるのが分かつてきだした。

少し怖いような気もしたけど・・・

独占欲のようなものが働いて気持ちよかつたのも確かや・・・

彼女は俺の意見で動くようになつて、自分で考えなくなつた。

俺だけの為に生きているようになつて・・・・・

彼女の人生に責任をもたなあかんなと思い出したころに、ある光景を見つめました。

本間に見つめましたと言つ感じやつた・・・・

私の心は嫉妬ではちきれそうで、時ちゃんの私の肩に置かれた手の感触

で何とか平静さを保つていた。

「制服姿の高校生の男女が楽しそうに、肩を並べて商店街を歩いてて女の子のカバンを男の子が持つて、女の子は買い物袋を抱き抱えて。周りの人が見えへん様な感じで笑い合つてた。

ショックやつた・・・

自分が汚く思えて横にいる彼女の手を取つて逃げた。

次にその高校生の二人

を見たときには向かい合つて喫茶店にいた。

学生服は着てへんかつたけど、すぐに一人やと通りの向こう側にいても

分かつた・・・

男の子が女の子の髪に触るのを見た時は自分のした事を後悔して、自分自身に腹が立つて、部屋の物をメチャクチャにした。

親はビックリして何が有つたのか聞くし、言えないし、苦しかつた。そんな俺の様子を見て、聞いてきたから・・・

自分の感情をぶつける様に相手の事も考えずに馬鹿正直に話した。彼女にある女性をダブらせていた事。

いつの間にか吉川茜が俺の頭の中では、他の女性に変わつてた・・・。それが誰かも話した。気が付かないでその人を愛していた事・・・。何度も誤つて許して欲しい言つて、別れ話をしたんやけど、彼女に取つ

ては急な言いがかりみたいな感じやつたんやろな、何度も会つて話してんけど分かつてもらえへんかつた。

理不尽な話やもんな・・・

暫くしたら彼女から連絡が無くなり、ホツとしたけど、気になつて家に行つたら、親は俺と一緒に思つて何日も連絡が無いので、帰つてきたら早く結婚する様に言つ積もりで居たそうや・・・

彼女の置手紙にもそれらしい事が書いてあつたし、

そや無いことが分かつて大騒ぎになつて、やつと居所が分かつて迎えに行つたら男の人と暮らしてた。

付いたその日に知り合つた人で仕事もしてなくて彼女が働いて生活をし
てているということやつた。

一度家に帰ろうと頼んだけどあかんかった。

自分はこれからどんどん落ちていく、これは俺への復讐やそうでも

せん

と生きて行かれへんそり言われて。

彼女の家の人には、俺に申し訳ないで言つし、そんなん反対やのに。俺の平常心はイッパイイッパイやつた。

影に隠れてある人をこつそり見ることで、何とか正常であった。あのころは本間にしんどかったな・・・・。暫くして落ち着いた頃に俺自身に変化が起きた、女性が集まって居る所へ行くと気分が悪くなつて吐き気がするようになつたり・・・・心が緊張してそこにおられへん様になつたりして・・・・今はそんな事は無いけど。

その頃から女性より男性と居る方が落ち着くよになつた。そんな時や、死のうと思つたんは・・・・。愛する人に、自分が起こした事とはいえ、愛も告げられず、愛することも出来ず、一生傍に居ることも出来ない・・・・。一人の女性の人生も変えてしまつて、その償いも出来ない。死んでしまえば楽やろなつて、それで海に車で飛びこんでんけどな。自分は正常やと思つてたけど狂つてたんやろな・・・・。俺はどこまでアホなんやろな・・・・。長い音の無い静かな時が過ぎた。

私から声を出した。「時ちゃん、女子高校生つて私の事?」もしかして。

「うん、そうや」当然という様に答えた。

「じゃ、ある人つて誰?その人とはどうしたん?」

涙声で聞いた。神様助けて!

「・・・今、俺の膝枕で泣いている。・・・一生こつしていいたいな」

ここにいたらあかん、帰ろう。

「時ちゃん、帰る」私の心中は、神に対する失望感で一杯。愛を打ち明けられても、混乱した頭では受け入れられない。

「うん、送るは、ええやろ?」優しい声で言つてくれた。

時ちゃん、私は汚い。

ソファから立ち上がって、座っている彼に、

「時ちゃん、凄い事があつたんやね、・・・ ありがとう、今も私の傍に居てくれて。・・これが今感じている事で・・・ 時ちゃんギュウとして」

立ち上がって、大きな腕で私を包み込んで、ギュウと力を入れ抱いてくれた。

その時急に吐き気がして「気持ち悪い・・はきそう」そう言つて、トイレへ駆け込み吐いていると、外で「どうしたん、大丈夫か？」オロオロした時チャンの声が聞こえ、急いで出た。

「どうや？ 大丈夫か？ 病院行こう」 貴方はどこまでも優しい、絶対に他の人に渡したくない。その為だつたら嘘も立派についてみせる。

洗面所で口をゆすいでいる、玄関のチャイムが鳴つた。

時ちゃんが濡れたタオルを私に渡して、インターほんに出ると

「吉田くんや、朝から何やろ」 そう言つと玄関へ行つた。

私も洗面所を出ると、玄関に吉田さんが居て私を見ると、ビックリした顔をして「「」めん、お邪魔した？」 冷やかすように言ひ、

時ちゃんが「うーん、今はチョット・・・」と言つと、私は急いで「うーん、今帰るとい、どうぞ」 そう言つたとたん、又吐き気がして、トイレへ飛び込んだ、ドアの向こうでは、

「どうしたんやろ、さつきからほいてるねん」 困つた様な時チャンの声。

「あつ！ 妊娠か？・・・ そんなはず無いはな」 吉田のアホの声がした。

笑つてしまつわ、アホやな。そう思つた次の瞬間、そうだ妊娠だつたら

すべての事が一気に解決するかもしれない。

時ちゃん以外の人と妊娠すればいいんだ。

私は時ちゃんの傍に一生居られればいい。其れだけが願いや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2617a/>

愛し方

2010年10月20日13時37分発行